

1 自己評価及び外部評価結果

(別紙4)

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2491300287		
法人名	社会福祉法人名張育成会		
事業所名	高齢者グループホームひかり		
所在地	三重県名張市美旗中村2326-5		
自己評価作成日	令和5年 月 日	評価結果市町提出日	

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaiyokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action=kouhvu_detail_022_kani=true&JizyosyoCd=2491300287-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 三重県社会福祉協議会		
所在地	津市桜橋2丁目131		
訪問調査日	令和6年1月29日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

本人の思いを大切に、その思いに沿った支援を行うことを職員は心掛けています。日常生活のあらゆる場面で入居者の意向をお聞きしている。日々の暮らしの小さな選択の積み重ねが『その人らしい暮らし』に繋がると考え実践している。単調な毎日にならないように、午前と午後には入居者が選択した好みのレクを取り入れている。また日曜日には平日よりも手の込んだレクを行っている。また毎日のラジオ体操を習慣化してメリハリのある暮らしの工夫をしている。庭で作った作物の収穫と収穫された野菜を使ったオヤツ作りなどを楽しんでいる。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

この事業所は、設置する法人が古くから障害者支援に取り組んでおり、その実績は県内でも多大な評価を得ている。この評価を基に高齢者支援事業にも参加してきたためか、職員の対応がよくなされていると認められる。職員相互のやり取り、職員と利用者のふれあい、利用者への支援等から確認できた様子は、理念のキーワードのいうのんびり、おだやか、笑顔にあふれていた。また業務の経験が浅い職員でも、“仕事が楽しい”“いやなことはない”というように職員集団が円滑にまとまり、組織がよく機能している職場であると認められる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目: 23, 24, 25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目: 9, 10, 19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者や職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目: 18, 38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目: 2, 20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目: 38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目: 4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目: 36, 37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働いている (参考項目: 11, 12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目: 49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごさせている (参考項目: 30, 31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目: 28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Alt+)- + (Enter+)- です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所理念を壁などに掲げて常に職員の意識が向くようにしている。理念にあるキーワード『のんびり』『おだやか』『えがお』『よりそう』については事業所クレド(信条)と連動させ共有をした上での実践を目指している。	毎年法人と事業所が協議する場があり、それを基に事業所のクレド(信条)と職員との意見交換による意識レベルを配慮したキーワードを設定し、実践につなげている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナウイルス感染症は5類に移行されたが、法人の感染症対策は一部が緩和されつつも継続しており、日常的な地域との交流の復活までには至っていない。	コロナ禍から戻りつつあり、中断された事業が少しずつ再開している。法人の多目的ホールで子ども会行事(プレゼント交換やハロウィン等)をしたり、Xマスをしたり、他の施設訪問をしている。	事業所としての地域に働きかけた事業がいくつか再開されている。今後は利用者、家族や地域等の意見を汲み込んだり、事業所と地域が一体になるような事業を工夫されることを期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	職員が認知症カフェにて研修の講師を務めるなど、地域の人々に向けて事業所が持つ認知症に関する知識を広げている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	8月より対面での運営推進会議を再開している。毎回、事業所の報告を行い、委員から意見を頂いている。その意見を反映して業務改善を行うなど運営に活かしている。	2カ月毎に委員会をしているが、昨年8月から対面会議を行っている。議題は事業所の業務、ヒヤリハット、業務の進捗等多彩に説明されており、対面開催後は意見交換も活発になされている。開催後資料は欠席家族にも公開されている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	地域包括支援センター、介護高齢支援室、生活支援室など市町村の担当者に、必要時に連絡を入れたり、市町村の担当からの問い合わせを受けるなど協力関係を築いている。	分からないこと、迷うようなことがあればすぐ行政担当に相談している。生活保護利用者が1名おり、保護担当とよく交流している。地域の状況等は“まちの保健室”といつも情報交換している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関についてはやむなく施錠をしている。毎月1回、身体拘束適正化委員会を開催し、事業所内における身体拘束の有無の確認と日常の支援の振り返りを行いながら不適切な支援について学び続けている。	委員会は定期に開催し、事例や業務での気づき、気づかないネグレクト等について報告、意見交換をしている。会議録はパソコンに打ち込み、文書に綴じこんでいる。事業所は交通頻繁な公道に面しているため、玄関の錠はオートロックにしてある。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることのないよう注意を払い、防止に努めている	虐待防止マネージャーが11月に三重県障害者虐待防止研修に参加をした。その内容について事業所の職員に伝えた。全職員が10月に神戸市高齢者虐待防止研修動画を視聴した。それを元にディスカッションを重ねている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるように支援している	令和6年2月17日(土)に伊賀市社会福祉協議会事務局長を招き『成年後見制度研修』を開催する予定となっている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約や解約の際には書類を見ながら十分な時間を取って丁寧に説明をしている。疑問点等についても納得が得られるように説明を重ねている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議には家族代表に参加を頂き意見を頂戴している。その他の家族からは面会時や電話対応時に意見を聞き取っている。利用者については日常の会話の中で意見を拾い上げている。	近くに住む家族はよく来訪してくれる。東京等遠距離に住む家族には郵送やTELでやり取りしている。遠方の家族自身が利用者や自宅を心配し、時々様子を見に来ている。しかし事業所に対し、意見や要望を伝えてくることは少ない。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議や法人内メール、面談など意見を聞く機会を複数設けている。意見や提案については検討をして可能なものについては実現をさせている。	月1回職員会議をし、意見交換している。要望や提案があれば文書にする様式はあるが、実際は口のほうが早く伝わっている。利用者に関する気づきや意見はケース記録に書いて全体で共有するようにしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者と職員が面談を行い、職員の思いや意見を聞く機会を設けている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	9月に職員3名が外部研修の『認知症基礎研修』を受講した。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナウイルス感染症は5類に移行されたが、同業者との交流復活までには至っていない。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前の段階で本人との面会を行い、不安なことや要望について聞き取っている。特に不安がある場合は何度でも丁寧に説明を行い不安の解消に努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前にはホームを見学して頂き、直に様子を感じ取ってもらうようにしている。その中で生じた疑問や要望についてを聞き取り、それらについて話し合う中で信頼関係を築くよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人や家族と話をすることで得た情報から必要とする支援を見出すように努めている。他のサービスが必要な場合には関係施設等に連絡を取るなどの対応をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者から「職員の手助けがしたい」との申し出があれば有難く受けようとしている。職員の業務を手伝って頂くことに対して感謝の言葉を欠かさず伝えている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	定期的に本人の様子を家族に伝えている。本人に変化が見られる場合などは支援について相談をするなど、共に考えて支えていく関係作りに努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	外泊や外出が可能となり、家族と出かけることで馴染みの場所や馴染みの人との交流を持つ利用者も複数おられる。	コロナ禍の落ち着きで家族と共に食事や理美容院、趣味の集まり等へ出かけるようになった。中には外泊し自宅へ行く場合もある。以前に付き合っていた友人、知人が来訪してくれることもある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者の性格や特性を把握して、人間関係がスムーズにいくように目配りをしている。トラブルなどが発生した場合は職員が間に入り関係改善を図るなど調整の役目を果たしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後も相談があれば対応をしている。アドバイスをしたり情報を提供するなど出来る支援を行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	現場に30分から1時間ほど出て、レクリエーションを行いながら希望や意向の把握に努めている。また状況によっては直接本人と話し合っている。	日頃の会話をとおして利用者の気持や希望を理解している。回想法を活用したり以前写したDVDの活用もある。発語困難な利用者もいるが、その表情を見れば大体のことは分かる。把握した要望、思い等は記録し、職員で共有する。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	生活歴については入居前情報や主治医、家族からの聞き取り、出来る限り入居前の生活を継続してもらおうとしている。デイサービスを利用している場合は利用事業所から様子を聞いている。担当ケアマネジャーが居る場合はそちらからも情報を貰っている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個々の利用者の日々の状態については〈ほのぼの〉の記録から読みとること、直接ケアマネジャーが行うレクリエーション、あるいは広報用のブログ、SNSの取材などを通じて、心身状態や有する力の現状把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	施設サービス計画書、ニーズの整理表等関係書類のコピーをファイルしたものを渡してあり広く意見をもらうようにしている。家族にはメール等で近況を伝え意見を頂いている。本人については『ひかり町内会』などの集まりを通じて意見をもらっている。それらを集約して介護計画に反映させるようにしている	職員からの聞き取りで3か月毎にモニタリングし、ケアプランを策定している。変化が少ないとケアプランは6カ月で見直している。ケアマネと職員は利用者の状態を常に話し合い、記録もしている。策定したケアプランは家族にも手渡している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録は電子データとして保存し、必要に応じてグループウェアを、連絡ノート、昼礼などを通して支援の実践や介護計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	即応性のある昼礼における簡単なミーティング、連絡ノートなどを通して新たなニーズの掘り起こしに努めているが、柔軟な支援やサービスという多機能化にはまだ至っていない。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ流行のため、地域資源との協働はなされていなかった。今後、進めていきたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医による月1回の往診を受けている。主治医については全入居者が事業所指定の同じ医師ではなく、中には在宅時の主治医に継続して往診を受けている入居者もいる。臨時受診については家族が同行することもある。	協力医は定期に往診しており各利用者の主治医である。1名は入居前からの医院が主治医となり往診している。歯科協力医も往診している。精神科、整形外科、皮膚科等専門医への通院は職員が同行している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	往診担当の看護師にはメールや電話で入居者の体調について相談をして指示を仰ぐことがある。法人の看護師については、必要時に訪問を頂きアドバイスをもらうこともある。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院時には必要な情報書類を病院に持参し、退院時には入院中の情報を病院側から受けるなど連携を図っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に終末期医療には対応していない事を伝え納得をして頂いている。重度化した場合には必要に応じて、次の施設探や入所の申請等についても協力をしている。	家族には入居時に終末期対応できない旨を伝えている。協力医も緊急時対応ができる体制でない。事業所で対応困難になれば、別法人の終末対応できる施設や事業所を紹介している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	令和5年度は事業所の全職員が救命救急講習を受講した。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	月1回、火災もしくは地震の避難訓練を行っている。防災頭巾を椅子やソファに座布団として置くことで常に手に取り避難しやすいようにしている。	月1回、テーマを決めて避難訓練をしている。訓練の都度、消防署に通報している。地域的に水害は考えられず、日常は火事と地震に気を付けている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	丁寧に話すことを心掛けている。入浴や排泄などプライバシーに配慮が必要な場面では特に注意を払った声掛けを行っている。	いつも大声は出さず、丁寧に話すよう心がけている。トイレ介助はやらざるを得ない人にのみ声をかけ行っている。自分がされたいやだと思うことはしない。記録、書類の保管にも気を付けている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常の小さな事に関しても本人の意向を伺うようにしている。意思の伝達が難しい入居者については表情や様子などから思いを察するようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	日常の小さな事に関しても本人の意向を確認し、その思いを尊重して出来る限り意向に沿った支援を心掛けている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	訪問理容を受ける前には好みの髪型を聞き取り職員がイラストに描いて理容スタッフにそれを見せ説明をして理髪をお願いしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	給食の配食を受けているため、調理をすることは無いが、テーブル拭きや下膳、皿洗いなど入居者に行ってもらっていることがある。	副食は法人の調理場で一括調理し運んでいる。ご飯と汁、朝食は事業所職員が作っている。利用者の希望や好みは法人の管理栄養士がよく聞いてくる。おやつは事業所に対応、イベント時は調理場と事業所の対応を取り混ぜている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事や水分の摂取量についてはチェック表に記入して職員が把握できるようにしている。長期に渡り摂取量が少ない場合は医療機関に相談をするが、そうでない場合は本人に合わせ無理強いをしない支援を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	起床時と就寝前には一人ひとりに合わせた口腔ケアを行っている。月1回の歯科往診では口腔内のメンテナンスも受けている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表から排泄のリズムやタイミングを読み取り、自立以外の必要な方には定時排泄の声掛けを行っている。	排泄チェックで声掛けし、誰もがトイレを使用できるよう支援している。布パンツ使用の他、リハパン使用、パルーン装着もあり、それぞれに対応している。便秘には食事に注意しているが、時には摘便することもある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	腸の動きが活発になるように日常的に体操を取り入れて体を動かすようにしている。水分については定時の配茶以外にも自由にお茶が飲めるようにお茶ポットを常備している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	1週間の入浴予定表はあるが、その日の利用者の様子や気分によって臨機応変に変更をして対応をしている。湯温や入浴時間等は個々の好みに合わせ心地よく入浴が出来るように努めている。	利用者の体調や希望で入浴しているが、最低でも週2回は入浴できるよう、午前、午後の順番を決めている。入浴剤は使用できない浴槽になっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	安眠を確保できるように、湿温計で居室内の湿度と温度を把握した上で加湿器やエアコンで快適な状態を保っている。照明についても明暗や光の色など好みの状態に設定している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人ファイルの薬情報は常に確認できる状態にある。臨時薬や変薬があれば、口頭での申し送り、申し送りノートへの記入、グループウェアでの配信など複数の伝達方法により、情報が共有できるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	集団レクもあるが、それとは別に自己選択で好みのレクを選んで頂くように声掛けをしている。人によっては塗り絵、テレビを見る、廊下を歩くなど様々な楽しみ方があるが、個々の思いを尊重している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナウイルス感染症は5類に移行されたが、ホーム全体でいえば気軽に戸外に出かけることはまだ出来ていない。法人の敷地内を散歩する程度に留まっている。家族と外出や外泊をされている方については希望が叶えられている。	今のところは園内散歩や日光浴が主であるが、昨年秋からは家族の協力で外出、外泊に連れ出すようになった。体力があって職員とともにゴミ出しに行く利用者もある。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を所持している利用者はいない。お金を使いたいという希望も聞かれない。希望があれば家族を交えて相談をすることになる。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を使用している利用者が1名いる。その方は1週間に何度も長女に電話をして会話を楽しまれている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用の空間は、快適に過ごして頂けるように室温や湿度をエアコンや加湿器で調整している。季節感を採り入れるために、レクリエーションで季節に合わせた作品を作り共用部分に飾り付けている。	朝起きたら、そのまま夜まで部屋には戻らない利用者が多い。職員とともに細工物の手作業をしたり、作った作品や季節を表す品を壁等に飾ったり、ソファでゆったりしたり、昼寝したり、利用者それぞれに過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用の空間にはソファを2個所に分けて設置している。その他にテーブル席もあり、複数で過ごすことも独りで過ごすことも出来るようになっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室の家具の配置は本人と家族が相談をして決める。レクの作品を壁中に貼り付けて楽しんでいる利用者や使い慣れた椅子を持ち込んで座って寛ぐ利用者もいる。	ベッド、エアコン、カーテン、布団（リース）は事業所で用意しており、個別に必要なもの、好みの品、趣味の品（クッション、ぬいぐるみ、お守り、その他）等は各自が持ち込んでいる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室の表札、トイレや浴室などの案内表示、トイレ内には自動ボタンの説明表示、トイレの照明の説明表示など「みればわかる」「よめばわかる」工夫をしている。		